

J.Brahmsのオルガン音楽

——11のコラール前奏曲 op.122を中心にして（その1）——

小 林 み ゆ き

はじめに

ドイツ後期ロマン派の作曲家 Johannes Brahms (1833-1897) が生み出したオルガン作品の数は少ない。しかし、それらの作品は、彼の人生の節目に登場し、特に「11のコラール前奏曲 op.122」は遺作であり、彼の作曲人生の集大成ともいえる作品である。何故、ブラームスは死を目前にして、作品の表現手段をオルガンという楽器に託したのであろうか。彼は、この作品を演奏することも演奏されることもなくこの世を去っている。彼の脳裏にあったオルガンの響きとはどのようなものであったのだろうか。華やかでよりシンフォニックなオルガン音楽が全盛を極めている中、ブラームスはあえてそれに逆行するかのよう過去の作曲技法に固執してオルガン音楽を創造した。しかし、そのようにして仕上げられた作品は、シンフォニックで華やかなオルガン作品に決して引けをとることなく、ロマン派オルガン音楽の香りを十二分に放ち、オルガン音楽史上も重要な位置を占めている。私はこの論文で、このようなブラームスのオルガン音楽（「11のコラール前奏曲 op.122」を中心にして）を、その成立に関わる過去の音楽（作曲家）の影響と宗教的声楽曲（歌詞）の内容に目を向けることで、ブラームスの作曲人生におけるオルガン音楽の意義を改めて問い直してみたいと思うのである。また、それらを踏まえた上で、ブラームスのオルガン作品演奏法についても、オルガン演奏者の立場から提案したいと考えている。

1. Johannes Brahms の生涯とオルガン音楽

1) ブラームスとオルガンの出会い

ヨハネス・ブラームスは、1833年5月7日に

北ドイツのハンブルクで、小さな管弦楽団のコントラバス奏者 Johann Jakob Brahms (1806-72) の息子として誕生した。ブラームスは、はじめ父親から音楽の手ほどき（ヴァイオリンとチェロ）を受け、幼時から音楽的才能を示した。7歳のときハンブルクの音楽教師 Otto F.W.Cossel (1813-65) についてピアノを学び、10歳で公開演奏会に出演。その後、F.W.Cosselの師 Eduard Marxsen (1806-87) に師事し、ピアノと音楽理論を学び、作曲も試みるようになった。二人の名教師のおかげで、ブラームスは確実なピアノ演奏技術とJ.S.バッハの音楽から初期ロマン派音楽までの基本的作曲技法を習得することができたのである。その結果、ブラームスは作曲家であることと並行して、19世紀の代表的ピアニスト（巨匠）としても有名になった。

ブラームスとオルガンの出会いは次の通りである。ブラームスの家族はルター派プロテスタント教会の信者であった。ブラームスはハンブルクの St.Michaels 教会で幼児洗礼を受け、日曜日には礼拝に出てオルガン演奏と説教に耳を傾け、ドイツ・コラールを賛美し、彼自身オルガンで合唱の伴奏をしたりしていた。St.Michaels 教会のオルガンは、1770年 J.G.Hildenbrand 製のバロックオルガン^(註1)であり、ブラームスが最初に出会ったオルガンである。このオルガンの響きを想定して、彼の初期オルガン作品は完成したと考えられる。北ドイツには多くのプロテスタント教会があり、教会におけるオルガンの役割は大きかった。オルガンはブラームスの身近な所に存在していたのである。ブラームスが初期オルガン作品を生み出した時期には、彼は集中的に対位法の研究を行い、J.S.バッハのコラール前奏曲を収集し、そのオルガン演奏も行っ

ている。

1862年からブラームスは、ウィーンに定住するようになる。そこで彼は、J.S.バッハのオルガン作品（自由作品）を定期的に演奏している。ウィーンにはブラームスが演奏した二つのオルガンがある。一つ目は、Piaristen教会のオルガンで、1858年 C.F.Buckow 製^(註2)。二つ目は、Votiv教会のオルガンで、1878年 E.F.Walker 製^(註3)である。両方ともロマンティックオルガンで、それらの響きを想定して後期のオルガン作品「11のコラール前奏曲 op.122」が生み出されたと考えられる。ウィーンの大教会は、北ドイツと違ってほとんどがカトリック教会である。従って、もし、プロテスタント信者のブラームスがウィーンでオルガニストの地位を得ようと望んでも、容易ではなかったと推測できるのである。しかし、1879年には、かつてJ.S.バッハが活躍したライプツィヒのSt.Thomas教会のカントールに就任するようブラームスに対して申し出があった。彼はその申し出を諸事情により断ったということだが、それは、ブラームスが教会カントール（オルガニスト）としても人々に受け入れられる存在であったことを裏付けている。そのような経緯もあるので、オルガン作品数のみでブラームスとオルガンの関係を単純に論じることはできないと考えるのである。

2) ブラームスの年代別オルガン作品の紹介と成立過程について

ブラームスのオルガン作品は、第一期（初期）と第二期（後期）に分けられる。第一期と第二期の間には38年間の空白がある。

第一期

- 1 8 5 6 年 Präludium und Fuge a-moll WoO9
(1927年に出版)
- 1 8 5 6 年 Fuge as-moll WoO8 (1864年に
公開、1884年に出版)
- 1 8 5 7 年 Präludium und Fuge g-moll WoO10
(1927年に出版)
- 1 8 5 8 年 Choralvorspiel und Fuge über „O
Traurigkeit, o Herzeleid“ a-moll

WoO7 (1882年に公開)^(註4)

第二期

- 1 8 9 6 年 Elf Choralvorspiele op.122 遺作
(1902年に出版)

前にも述べたように、ブラームスの集中的な対位法研究の成果が第一期のオルガン作品に現れている。ブラームスは、1856年から57年にかけてデュッセルドルフに滞在していた。その間に、彼は作曲家としてさらに向上するため、親友でヴァイオリニスト兼作曲家のJoseph Joachim (1831-1907)^(註5)と対位法の研究に没頭したのである。それは、対位法課題の交換添削という形で実施された。G.P.da Palestrina (1525/26-94) の「教皇マルチェスのミサ曲」の筆写も行った。ここで私たちは、Robert Schumann (1810-56) が1845年に作曲家としての復活をかけて、妻 Clara Schumann (1819-96) と共に行った対位法の研究を思い起こすのである。その研究後、ロベルト・シューマンは作曲家として巨匠期に入っている。対位法の研究は、ブラームスにとっても創作活動における行詰りを解消するための重要な一手段であった。対位法の勉強は、バロック時代以降の音楽家養成課程には欠くことのできない基本部分である。そして、それは今日まで続いている。多くの作曲家達が対位法の課題に取り組むことで、音を自由自在に操るための忍耐力や集中力を養い、そこからさらに新しいものを生み出す原動力を得るのである。

第二期のオルガン作品は「11のコラール前奏曲 op.122」のみである。1890年ごろから、ブラームスは体の衰えとともに創作活動の終焉が近づいたことを感じるようになった。ゆえに、1890年から96年にかけて作曲された晩年の作品には、彼の死生観、厭世観が強く現れている。その中でも最後の作品となったのが、「11のコラール前奏曲 op.122」である。1896年5月に38年間の空白を経て、彼は再びオルガン前奏曲という古い形に戻って人生の最後を迎えたのである。そこには、今でも多くの疑問が残っているが、ブラームスとオルガンの絆の深さを感じ取

ることができる。

2. 過去の音楽とブラームス

ブラームスは、音楽の最高峰が彼以前に築かれていたと固く信じ、過去の音楽に対して大きな関心を持っていた。そして、過去の音楽を自分の創作、あるいは自分が指揮する合唱団の演奏プログラムに取り入れるだけでなく、さまざまな作曲家達の楽譜の編纂にまで関わり、研究者としての一面も見せている。音楽学は、ロマン派の時代に飛躍的に盛んになり、多くの優れた音楽学者が登場している。ブラームスの研究は、そのような音楽学者達との交流を通して行われた。

1) ルネサンス音楽とブラームス

ブラームスの関心は、バロック時代の音楽にとどまらず、ルネサンス音楽にまでさかのぼる。H.Isaac (1450~55-1517)、H.L.Haßler (1564受洗-1612)、H.Praetorius (1560-1629)、J.Eccard (1553-1611) などのドイツ・ルネサンス音楽の研究にも取り組んでいる。「11のコラール前奏曲op.122」の最後のコラール前奏曲Nr.11 „O Welt, ich muß dich lassen“ には、ハインリッヒ・イザークの世俗声楽曲「さらば、インスブルックよ」の旋律が用いられている。ブラームスは、ドイツの音楽学者 Gustav Nottebohm (1817-82)^(註6)と知り合いになり、彼を通して、多くのルネサンス音楽の楽譜資料に接する機会を得た。また、1850年代後半からハンブルク女声合唱団における指導と演奏を行ったこと、そして、1863年から一年間ウィーン・ジングアカデミーの指揮者に就任したことが、ルネサンス音楽の実演を促し、彼のルネサンス音楽への造詣がさらに深まったと考えられる。

2) バロック音楽とブラームス

ブラームスは、変奏曲、パッサカリヤ、フーガ等の厳格な作曲技法、つまり、対位法芸術により多くの理解を示した。

声楽曲においては、J.S.バッハをはじめ、彼以前のドイツ・プロテスタント音楽の巨匠達、

Heinrich Schütz (1585-1672), Johann Hermann Schein (1586-1630) などの作品を研究し、演奏している。ブラームスの最大の声楽曲「ドイツ・レクイエム」1868年の第1曲には、詩篇第126篇5節の „Die mit Tränen säen“ を用いて作曲している。古い北ドイツの多くの作曲家達がこの歌詞を用いて声楽曲を作った。その中でも、J.H.シャインの1623年 „Israelis Brünlein“ にあるモテットが有名で、ブラームスは、彼の作品にシャインの表現技法とモテット様式をうまく融合させている。

オルガン音楽においては、Samuel Scheidt (1587-1654), Dietrich Buxtehude (1637頃-1707), Johann Pachelbel (1653-1706), Georg Böhm (1661-1733), Nikolaus Bruhns (1665-97) などのバッハやヘンデルの先輩達の影響も受けており、ブラームスの広範囲に渡るバロック音楽研究の成果を見ることができる。バッハのオルガン作品研究の成果は、ブラームスのオルガン音楽「11のコラール前奏曲」に強く現れている。この作品がブラームスの遺作となったことは、J.S.バッハがオルガンのためのコラール編曲 „Vor Deinen Thron tret' ich hiermit“ BWV668で、死を迎えたことと重なっている。これは単なる偶然ではなく、ブラームスが自分の死を予感した時に、意図的にバッハに習ったと推測することができる。

ブラームスは、ドイツ・バロック音楽の研究を、ドイツの音楽史家 Philipp Spitta (1841-94)^(註7)を通して深めた。ヘンデル研究に関しては、ヘンデル研究家 Friedrich Chrysander (1826-1901)^(註8)の影響を受けている。

3) 古典派音楽とブラームス

J.ハイドン研究に関しては、伝記「ハイドン」を著した Carl Ferdinand Pohl (1819-1887)^(註9)、ハイドン全集の出版に関わった Eusebius Mandyczewski (1857-1929)^(註10)が、ブラームスに協力している。1873年に、「ハイドンの主題による変奏曲」が生み出されている。

W.A.モーツァルトに関しては、交響曲第2番を作曲している最中に、未完「レクイエム」の

校訂作業に取り組んでいる。^(註11)ブラームスは、モーツァルト自筆の楽譜と彼の弟子ジュスマイヤーの補筆部分を区別しようと試みたのである。

4) L.v.ベートーヴェンとブラームス

ベートーヴェンは、ブラームスが生涯尊敬した作曲家である。ブラームスの熱狂的な支持者達は、彼を正当なベートーヴェンの後継者と見なした。ブラームスの友である指揮者・作曲家 Albert Hermann Dietrich (1829-1908) ^(註12) は、1853年11月の手紙に次のように書いている。「もし、ブラームスの音楽がそもそも誰かを思い出させるとしたら、それは、晩年のベートーヴェンである。」^(註13) また、ドイツの指揮者・ピアニスト Hans von Bülow (1830-1894) ^(註14) は、ブラームスの「交響曲第1番」をベートーヴェンの交響曲第9番に続く「交響曲第10番」と題して、1877年にハノーヴァーで指揮演奏し、「3大B」(Bach, Beethoven, Brahms) という名言を残している。^(註15) ブラームス自身、ベートーヴェンが切り開いた道を仰ぎながらも、さらにベートーヴェンを乗り越えて新しいものを創造しようとしていた。それ故に、彼の交響曲は慎重に練り上げられてから発表されている。また、「チェロ・ソナタ第1番」には、ベートーヴェンのチェロ・ソナタ第5番の第3楽章の研究が生かされている。ブラームスのベートーヴェン研究において、音楽学者G.ノッテボームとの交流が果たした役割は大きい。

5) ロマン派音楽とブラームス

F.シューベルト研究の成果は、ブラームスの「ワルツ集op.39」と歌曲に現れている。また、1878年から行われた「F.ショパン全集」の編纂に携わり、ショパン作品校訂における中心的役割を担った。これは、ブラームスのピアノ作品等の創作に影響を与えたであろうし、オルガン音楽の創作にも間接的に波及していると、私は考えている。この他に、F.メンデルスゾーン・バルトルディーや恩師ロベルト・シューマンとその妻クララ、そして、対立していたとされる未

来派の作曲家達 (R.ワーグナー、H.ベルリオーズ、F.リスト) にも、ブラームスは目を向けて自分の創作活動に何らかの形で導入しているのである。晩年には、標題音楽のジャンルを融和な態度で評価していたようである。^(註16) このように、ブラームスの飽くなき探究心には目を見張るものがある。

3. ブラームスと宗教的声楽曲

1) 聖書とブラームス

ブラームスは、生涯熱心な読書家であった。新しく出版された本で興味のあるものはすぐに注文して取り寄せて読んでいた。従って、彼の部屋には常に数多くの本が置かれていた。11歳の時にブラームスが進学した学校では、ラテン語、英語、フランス語を学び、その開明的教育のもとで彼の詩的世界文学に対する関心が高められた。その膨大な本の中でもブラームスがいつもそばに置いて愛読していたのが聖書 (ルター訳) である。旧約聖書は暗記していた程であった。しかし、ブラームスは普通に自由なプロテスタント信者であった。自由で寛大な宗教観を持つブラームスは、彼の「ドイツ・レクイエムop.45」がプロテスタント教会内にとどまらず、宗派を超えてドイツ語圏 (オーストリアのカトリックを含む) のあらゆる演奏会場で演奏されることを望んだのである。オーストリアの音楽学者 Guido Adler (1855-1941) ^(註17) の的確な文言によると、「ブラームスはとても信心深い、福音派の文化領域に属するルター派の信者であった。聖書に精通し、教義上閉鎖的な宗派に対する嫌悪 (反感) により、宗派を超えて無神論者に至るまで、寛大で自由を求め、自由思想的であった。」^(註18) ブラームスは7歳から牧師のもとで宗教 (ドイツ・プロテスタント) 教育を受けた。その宗教教育は、14歳のKonfirmation (堅信礼) が教会で行われるまで続いたと思われる。そこで、ブラームスは、聖書はもとより古いプロテスタント・コラール (讃美歌) を学んだ。このコラルの歌詞はもちろん聖書に基づいて作られたものである。ブラームスは、自分の気に入った聖書の箇所やコラルをいつもメモに

書き留めていた。それらが、彼の宗教的声楽曲に、そして、オルガン曲（コラール前奏曲）に生かされているのである。ブラームスは熱心ではあるが、狭量なキリスト教信者ではなかった。しかし、ブラームスが愛した聖書の文言やコラールを織り込んだ作品は、彼の信仰そのものを浮き彫りにし、その寛大さで聴衆を暖かく包み込むのである。

2) 主要な宗教的声楽曲と歌詞

（聖書のドイツ文邦訳は、新共同訳聖書 旧約聖書続編つき 日本聖書協会発行2004年による。曲とコラールの題名は小林みゆきによる意訳である。）

① 2つのモテット op.29 (1860年完成)

混声5部合唱 ア・カペラ

第1曲 救いはわれらのもとに來たれり 新約聖書：ローマの信徒への手紙 第3章21節—28節を基にして作られたコラール „Es ist das Heil uns kommen her“ Text: Paul Speratus (1484–1551) Melodie: Mainz um 1390, Nürnberg 1523/24 「救いはわれらのもとに來たれり」の第1節を用いている。ドイツ語の歌詞は下記の通りである。

„Es ist das Heil uns kommen her von Gnad und lauter Güte; die Werk, die helfen nimmermehr, sie können nicht behüten. Der Glaub sieht Jesus Christus an, der hat für uns genug getan, er ist der Mittler worden.“ (註19)

第2曲 神よ、わたしの内に清い心を造れ 旧約聖書：詩篇 第51篇12節—14節「神よ、わたしの内に清い心を創造し 新しく確かな霊を授けてください。御前からわたしを退けず あなたの聖なる霊を取り上げないでください。御救いの喜びを再びわたしに味わわせ 自由の霊によって支えてください。」

② ドイツ・レクイエム op.45 (1865～68年完成)

ブラームスの最大の声楽作品。最初の構想から10年以上かけて完成した傑作。混声4部合唱 ソプラノ独唱 バリトンの独唱 大編成オーケストラ付

第1曲 新約聖書：マタイによる福音書 第5

章4節「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。」 旧約聖書：詩篇 第126篇 5節—6節「涙と共に種を蒔く人は 喜びの歌と共に刈り入れる。種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は 束ねた穂を背負い 喜びの歌をうたいながら帰ってくる。」 新約聖書：マタイによる福音書 第5章4節「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。」

第2曲 新約聖書：ペトロの手紙一 第1章24節「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、花は散る。」

新約聖書：ヤコブの手紙 第5章7節「兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい。農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。」 新約聖書：ペトロの手紙一 第1章24節「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、花は散る。」 旧約聖書：イザヤ書 第35章10節「主に贖われた人々は帰ってくる。とこしえの喜びを先頭に立てて 喜び歌いつつ シオンに帰り着く。喜びと楽しみが彼らを迎え 嘆きと悲しみは逃げ去る。」

第3曲 旧約聖書：詩篇 第39篇5節—8節「『教えてください、主よ、わたしの行く末をわたしの生涯はどれ程のものか いかによりがはかないものか、悟るように。』ご覧ください、与えられたこの生涯は 僅か、手の幅ほどのもの。御前には、この人生も無に等しいのです。ああ、人は確かに立っているようでも すべて空しいもの。ああ、人はただ、影のように移ろうもの。ああ、人は空しくあくせくし だれの手に移るとも知らずに積み上げる。主よ、それなら 何に望みをかけたらよいのでしょうか。わたしはあなたを待ち望みます。」 旧約聖書続編：知恵の書 3章1節「神に従う人の魂は神の手で守られ、もはやいかなる責め苦も受けることはない。」

第4曲 詩篇：第84篇2節—3節、5節「万軍の主よ、あなたのいますところは どれほど愛されていることでしょうか。主の庭を慕って、わたしの魂は絶え入りそうです。命の神に向かって、わたしの身も心も叫びます。いかに幸いな

ことでしょう あなたの家に住むことができるなら まして、あなたを賛美することができるなら。」

第5曲 新約聖書：ヨハネによる福音書 第16章22節「ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。」
旧約聖書：イザヤ書 第66章13節「母がその子を慰めるように わたしはあなたたちを慰める。」

第6曲 新約聖書：ヘブライ人への手紙 第13章14節「わたしたちはこの地上に永続する都を持っておらず、来るべき都を探し求めているのです。 新約聖書：コリント人の信徒への手紙一 第15章51—52節、54節—55節「わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。『死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。』」 新約聖書：ヨハネの黙示録 第4章11節「『主よ、わたしたちの神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、御心によって万物は存在し、また創造されたからです。』」

第7曲 新約聖書：ヨハネの黙示録 第14章13節「『今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである。』“霊”も言う。『然り。彼らは労苦を解かれて、安らぎを得る。その行いが報われるからである。』」

③2つのモテット op.74 (第1曲1877年完成、第2曲1863/64年完成) 音楽学者Philipp Spittaに献呈。第1曲が混声6部合唱 第2曲が混声4部合唱 ア・カペラ

第1曲 第1節 なぜ、労苦する者に光を与え

たのか 旧約聖書：ヨブ記 第3章20節「なぜ、労苦する者に光を賜り、悩み嘆く者を生かしておられるのか。」 第2節 旧約聖書：哀歌 第3章41節「天にいます神に向かって 両手を上げ心も挙げて言おう。」 第3節 新約聖書：ヤコブの手紙 第5章11章「忍耐した人たちは幸せだと、わたしたちは思います。あなたがたは、ヨブの忍耐について聞き、主が最後にどのようにしてくださったかを知っています。主は慈しみ深く、憐れみに満ちた方だからです。」 第4節 新約聖書：ルカによる福音書 第2章29節—32節「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見ただからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたのイスラエルの誉れです。」に基づいて作られたコラール „Mit Fried und Freud ich fahr dahin“ Text u. Melodie Martin Luther (1483-1546)「平和と歓喜をもってわれは逝く」の第1節を用いている。ドイツ語の歌詞は下記の通りである。

„Mit Fried und Freud ich fahr dahin in Gottes Wille; getrost ist mir mein Herz und Sinn, sanft und stille, wie Gott mir verheißen hat: der Tod ist mein Schlaf worden.“ (註20)

第2曲 おお救い主よ、天を開け コラール „O Heiland, reiß die Himmel auf“ Text: Friedrich Spee (1591-1635) Melodie: Köln 1638, Augsburg 1666「おお救い主よ、天を開け」を用いている。ドイツ語の1節の歌詞は下記の通りである。

„O Heiland, reiß die Himmel auf, herab, herab vom Himmel lauf, reiß ab vom Himmel Tor und Tür, reiß ab, wo Schloß und Riegel für.“ (註21)

④3つのモテット op.110 (1889年完成)

ブラームスの最後の合唱曲。第1・第3曲は8声、第2曲は4声の混声合唱 ア・カペラ

第1曲 わたしは卑しめられ 旧約聖書：詩篇 第69篇30節「わたしは卑しめられ、苦痛の中にあります。神よ、わたしを高く上げ、救ってください。」 旧約聖書：出エジプト記 第34章6節—7節「主は彼の前を通り過ぎて宣言された。『主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐

強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者。』」

第2曲 ああ、哀れな世 古いコラールの詞作者不詳 「ああ、哀れな世、おまえはわたしを欺く。」

第3曲 われらが苦しみの極みにあるとき コラール „Wenn wir in höchsten Nöten sein“ Text: Paul Eber (1511-1569) Melodie: Johann Baptista Serranus (1540-1600) 「われらが苦しみの極みにあるとき」の一節を用いている。ドイツ語の歌詞は下記の通りである。

„Wenn wir in höchsten Nöten sein und wissen nicht, wo aus noch ein, und finden weder Hilf noch Rat, ob wir gleich sorgen früh und spat,“

(註22)

⑤ 4つの厳粛な歌 op.121 (1896年完成)

バス独唱 ピアノ伴奏 画家Max Klinger (1857-1920) に献呈。

第1曲 人間に臨むことは動物にも臨み 旧約聖書：コヘレトの言葉 第3章19節—22節「人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊をもっているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。すべては空しく、すべてはひとつのところに行く。すべては塵から成った。すべては塵に帰る。人間の霊は上に昇り、動物の霊は地の下に降ると誰が言えよう。人間にとって最も幸福なのは、自分の業によって楽しみを得ることだとわたしは悟った。それが人間にふさわしい分である。死後どうなるのかを、誰が見せてくれよう。」

第2曲 わたしは改めてすべてを見た 旧約聖書：コヘレトの言葉 第4章1節—3節「わたしは改めて、太陽の下に行われる虐げのすべてを見た。見よ、虐げられる人の涙を。彼らを慰める者はない。見よ、虐げる者の手にある力を。彼らを慰める者はない。既に死んだ人を、幸いだと言おう。更に生きて行かなければならない人よりは幸いだ。いや、その両者よりも幸福なのは、生まれて来なかった者だ。太陽の下に起こる悪い業を見ていないのだから。」

第3曲 死よ、お前はなんと苦痛に満ちたことか 旧約聖書：シラ書 第41章1節—2節「死よ、お前を思うのは、なんと苦痛に満ちたことか、裕福で平穏無事に暮らしている者にとって、また、心を悩まさず、すべてがうまくいき、まだ楽しみを味わえる力を持つ者にとっては。死よ、お前の宣告はなんとありがたいことか、生活に困り、力衰えた者にとって、また、老け込んで、ありゆることに心を悩まし、頑固になり、忍耐を失った者にとっては。」

第4曲 たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも 新約聖書：コリントの信徒への手紙一 第13章1節—3節、12節—13節「たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ、予言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人人のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」

ブラームスの主要な宗教的声楽曲の歌詞（聖書の言葉やコラールの歌詞）を通して、私たちは彼の人生の終焉に向けて深まる死生観や厭世観を読み取ることができる。

ブラームスのコラール旋律に基づくオルガン作品「コラール前奏曲とフーガ a-moll Wo07」と「11のコラール前奏曲op.122」は、彼の宗教的声楽曲と強く結びついている。何故なら、人間の声が歌詞を歌い上げなくても、コラールの旋律と歌詞は表裏一体であり、コラールの旋律がパイプオルガンの澄んだ響きの中で浮き彫りにされると、歌詞の内容も間接的に伝わってく

るからである。むしろ、歌詞が直接歌われて表現されるよりも、もっと木目細やかにブラームスの内面性が表出されるという、ある意味で標題音楽に近いものになっている。特に「11のコラール前奏曲op.122」は、オルガン独奏曲でありながら、「魂の告白」という点においては、最後の宗教的声楽曲「4つの厳粛な歌op.121」の延長線上に位置するものと考えられるのではないだろうか。

ブラームスの声楽曲と器楽曲との結びつきについては、西原稔氏が次ぎのように述べている。「ブラームスにおいて器楽と声楽の相互の結びつきはさまざまに指摘されるが、声楽作品で大きく膨らませた音のイメージが、器楽作品の主題の創作や動機の展開手法の基本となったのである。」^(註23) また、吉田秀和氏はブラームスの作品における標題音楽的側面について次のように述べている。「彼の器楽曲の中には、純粹音楽のような顔をしていて、実はいろんな意味で標題音楽的な意味を込めたものもあります。ですから少し研究してみると、いろいろ引っかかってきて、オペラとまではゆかないけれど、まるで自叙伝みたいな、そういうものが隠れているのが見つかるようです。」^(註24)

4. コラール前奏曲とブラームス

ブラームスがコラール前奏曲に用いたコラールは、ほとんどが受難、死と永遠をテーマとするものである。コラール前奏曲は第一期と第二期に1曲ずつ書かれている。

1) コラール前奏曲とフーガ a-moll WoO7

1858年作曲（1882年Musikalischen Wochenblattにて公開）

受難のコラール „O Traurigkeit, o Herzeleid“
Text: Strophel Friedrich Spee 1628 Melodie: Mainz/Würzburg 1628 「おお悲しみよ、おお心の痛みよ」を用いている。

ドイツ語の歌詞は下記の通りである。

„O Traurigkeit, O herzeleid! Ist das nicht zu beklagen? Gott des Vaters einigs Kind wird ins Grab getragen.“ ^(註25)

この作品は、ハンブルクの女生徒Friedchen Wagnerに献呈された。1873年に、ブラームスはその複製をPhilipp Spittaに献呈している。創作のきっかけは、1856年7月のロベルト・シューマンの死にあると考えられている。憂鬱な雰囲気とコラールの編曲技法において、「コラール前奏曲op.122」を予知させる作品である。

2) 11のコラール前奏曲op.122

1896年作曲（1902年に出版）11のコラール前奏曲のうち初期に作られた7曲は、二人の友人Eusebius MandyczewskiとRichard Heuberger（1850-1914）^(註26)に献呈された。

1896年、ブラームスは重病で療養のためIschlに滞在していた。同年の5月と6月に作曲された作品である。その作曲技法は伝統的J.S.バッハのOrgelbüchleinに習っている。それは、当時人気のあった進歩主義的思考方になじむことができなかったブラームスの歴史的見解に適合した表現方法であったのかもしれない。この作品が生み出されたきっかけは、1896年5月21日のクララ・シューマンの死、そしてブラームス自身の死の予感にあると考えられている。選択された9つのコラールの歌詞（2つは2回曲がつけられた）は、すべて憂鬱で死への憧れの詩である。少し明るい雰囲気を持つ歌詞は2つあるが、その輝きはこの世のものではない。

3) コラール前奏曲の意義

以前に、ブラームスのオルガン音楽が彼の人生の節目に登場したことを述べた。そのオルガン音楽の中でも、コラール前奏曲はコラールの旋律を内蔵することで、純粹な器楽曲というよりも、より声楽的な器楽曲として私たちに受け入れられている。それは、コラールの歌詞が人間の声によって直接発せられずとも、コラールの旋律と表裏一体となっているが故に、優れた演奏を通して息づいて私たちに迫ってくるからである。ブラームスによって厳選されたコラールの歌詞には、必然的に彼の思いが十二分に込められている。従って、ブラームスのコラール前奏曲を演奏するには、コラールをよく理解す

ることから始めなければならないのである。

ブラームスが厳選した「11のコラール前奏曲 op.122」におけるコラールの歌詞について、そして、それらの歌詞を生かすための演奏法について、実演も含めてさらに研究を深めていきたいと考えている。

註

- (註1) オルガンのDispositionは“Johannes Brahms Sämtliche Orgelwerke” Edition Breitkopf 8396に掲載されている。
- (註2) 同上
- (註3) 同上
- (註4) WoO=Werk ohne Opuszahl 作品番号を持たない作品の略。
- (註5) ブラームスのヴァイオリン協奏曲の作曲に助言をしたことで有名。
- (註6) 作曲家でもあり、資料研究と楽譜校訂の方法の確立に貢献。特にベートーヴェン研究で有名。
- (註7) 著書「J.S.バッハ」はバッハ研究の出発点となっている。シュッツ全集とブクステフーデ・オルガン曲集の楽譜校訂の分野に貢献。
- (註8) ドイツの音楽学者。ヘンデル研究の権威。
- (註9) ウィーン楽友協会資料室室長を勤めた。
- (註10) ルーマニア出身の音楽学者。ノッテボームに師事。ポールの後任。
シューベルト・ハイドン・ブラームス全集の編集に携わった。ウィーン音楽院教授。
- (註11) Breitkopf & Härtel の全集版のために委嘱されたもの。
- (註12) 1853年11月 Ernst Naumann宛の手紙。
- (註13) Constantin Floros “Brahms und Bruckner” Breitkopf & Härtel・Wiesbaden 1980. S.37
- (註14) リストの弟子。リストの娘コジマと結婚。ミュンヘン宮廷歌劇場の第1指揮者。
- (註15) 註13に同じ
- (註16) 註13に同じ S.75
- (註17) 「季刊音楽学雑誌」発刊。プラハ・ウィーン大学教授。音楽学研究所設立。
- (註18) 註13に同じ S.17
- (註19) “Evangelisches Gesangbuch”
Ausgabe für die Evangelische Landeskirche in Württemberg Gesangbuchverlag Stuttgart GmbH, Stuttgart 1996.
Nr.342 S.666

- (註20) 同上 Nr.519 S.954
- (註21) 同上 Nr.7 S.63
- (註22) 同上 Nr.366 S.710
- (註23) 西原稔著「ブラームス」音楽之友社 2006年 S.161
- (註24) 吉田秀和著 歌崎和彦編「ブラームスの音楽と生涯」2000年 S.116
- (註25) 註19に同じ Nr.80 S.193
- (註26) オーストリアの作曲家、指揮者、評論家。

参考文献・楽譜

1. Constantin Floros “Brahms und Bruckner” Breitkopf & Härtel・Wiesbaden 1980.
2. Richard Taruskin “The Oxford History of Western Music” Volume3 Chapter45 Oxford University Press 2005.
3. Gerhard Nestler “Geschichte der Musik” Atlantis Musikbuch-Verlag 2005.
4. Hans-Jürgen Schmelter “Johannes Brahms” Heliopolis 1983.
5. Alfred von Ehrmann “Johannes Brahms” Breitkopf & Härtel・Wiesbaden 1980
6. “Johannes Brahms Werke für Orgel” G.Henle Verlag 1988.
7. “Johannes Brahms Sämtliche Orgelwerke” Edition Breitkopf 8396 1983.
8. “Evangelisches Gesangbuch” Ausgabe für die Evangelische Landeskirche in Württemberg Gesangbuchverlag Stuttgart GmbH, Stuttgart 1996.
9. 西原稔著 「ブラームス」 音楽之友社 2006年
10. ハンス・A・ノインツィヒ著 山地良造訳 「ブラームス」 音楽之友社 2003年
11. 吉田秀和著 歌崎和彦編 「ブラームスの音楽と生涯」 音楽之友社 2000年
12. 門馬直美著 「ブラームス」 春秋社 1999年